

生誕 120 年 猪熊弦一郎展 プレスリリース

1 開催趣旨

猪熊弦一郎（1902～1993）は 20 世紀日本を代表する画家です。香川県に生まれ、東京美術学校で藤島武二に師事しました。1926 年第 7 回帝展に初入選し、1934 年まで主に帝展で活躍。1936 年に小磯良平、佐藤敬、中西利雄、脇田和らと新制作派協会（現新制作協会）を結成し、以後同展を中心に作品を発表しました。1938 年渡仏し、マティス、ピカソと交流。第二次世界大戦の戦火を逃れて帰国した後はフィリピン、ビルマに派遣され作戦記録画を制作、戦後は三越の包装紙デザイン（1950 年）をはじめ、慶應義塾大学学生ホール（1949 年）や上野駅中央コンコース（1951 年）の壁画を手がけるなど、社会とのかかわりを強めていきました。1955 年再渡仏の途上で立ち寄ったニューヨークに魅せられ同地に留まり約 20 年間制作を続け、1975 年に健康上の理由からアトリエを閉じ、冬季はハワイ、その他の季節は東京で制作するようになりました。1991 年に幼少期を過ごした丸亀市に丸亀市猪熊弦一郎現代美術館が開館すると所蔵する全作品を寄贈しました。

本展は丸亀市猪熊弦一郎現代美術館のご協力のもと、代表作とともに壁画やデザインの仕事、身近な素材で作ったオブジェなどを紹介し、多才な画家の全貌に迫ります。

2 会期 2022（令和 4）年 9 月 17 日（土）～11 月 6 日（日）

休館日 10 月 3 日（月）、無料観覧日 11 月 3 日（木・祝）

3 観覧料 一般 1,300（1,040）円、高大・65 歳以上 1,100（880）円 中学生以下無料

*（ ）内は 20 名以上の団体料金 *高校生（市内在住または在学に限る）は無料

*身体障害者手帳・療育手帳・精神障害者保健福祉手帳をお持ちの方と付添の方 1 名様は無料

4 主催等 主催＝横須賀美術館

特別協力＝丸亀市猪熊弦一郎現代美術館／公益財団法人ミモカ美術振興財団

協力＝株式会社三越伊勢丹ホールディングス

5 関連事業 丸亀市猪熊弦一郎現代美術館学芸員によるギャラリートーク動画を会期中に美術館 YouTube で配信予定

お問い合わせ 横須賀美術館 〒239-0813 横須賀市鴨居 4-1

○ホームページ：<https://yokosuka-moa.jp/>

e-mail: kouhou@city.yokosuka.kanagawa.jp

○取材・画像提供に関すること 総務係：八島、江山 電話 046-845-1211

○展示内容に関すること 担当学芸員：日野原、中村 電話 046-845-1212

展覧会の見どころ

- 1 生誕 120 年を機に、改めて猪熊弦一郎の仕事を振り返る展覧会（巡回なし）
- 2 代表作に加えパブリックアートやデザインの仕事に関する資料や貴重な旧蔵品を展示

展示構成／内容紹介

1 章 初期作品

1921 年丸亀中学校を卒業した猪熊弦一郎は、東京美術学校受験のため上京し岡田三郎助主宰の本郷洋画研究所に学んだ。翌年入学した東京美術学校西洋画科では、のちに画家として活躍する岡田謙三、小磯良平、荻須高德、中西利雄、山口長男らが同学年にいた。3 年からは藤島武二の指導を受け、1926 年に《婦人像》で帝展に初入選、その後、《座像》、《画室》で特選となり、1933 年以降無鑑査となった。

しかし、1935 年の帝展改組に反対して帝展を離れ第二部会に参加、その第 1 回展に《海と女》を出品した。翌年、新文展参加を表明した第二部会を脱退し、光風会も脱退した猪熊は「一切の政治的工作を否定し、純粹芸術の責任ある行動に於て新芸術の確立を期す」ことを掲げ、小磯良平ら有志と新制作派協会を結成。第 1 回展に《二人》、《馬と裸婦》などを出品した。

2 章 パリ時代

1938 年 7 月、35 歳の猪熊は妻文子と共にパリに到着した。東京美術学校の同級生から遅れること約 10 年、念願のパリ行きだった。当時のパリは世界中から画家が集まる最先端の芸術都市で、猪熊が現代最高の画家として尊敬していたアンリ・マティスとパブロ・ピカソもパリで活動していた。滞仏中、マティスに自作を見てもらった猪熊は「お前の絵はうますぎる」という言葉に大きな衝撃を受けた。それはつまり「自分の絵になっていない」という意味で、画家として根本的な見直しを迫られることになった。

1939 年 9 月、第二次世界大戦が始まり、パリに危険が迫ったことから藤田嗣治夫妻とともにフランス南西部のドルドーニュ県レゼジー村に疎開し約一ヶ月滞在した。滞在資金が尽き、再びパリに戻った猪熊はドイツ軍が迫る中、滞仏最後の作品となる《マドモアゼル M》を完成させ、日本行の最後の避難船「白山丸」で帰国した。

3 章 戦中戦後

フランスから帰国後、軍部から従軍の命令を受けた猪熊は、1941 年に中国文化視察のため南京方面に派遣された。そこで目にした子供たちの姿を描いたのが《長江埠の子供達》である。翌年、陸軍省派遣画家の一人に選ばれ、フィリピンに派遣された。5 月には記録画制作のため陥落直後のコレヒドールに入り、凄惨な光景を前に手当たり次第にスケッチをした。1943 年 6 月、小磯良平と共にビルマに派遣され、ビルマ独立式典、泰緬鉄道建設現場などを取材した。帰国後、腎臓を患って入院した猪熊に藤田嗣治はユーモアのある絵手紙を何通も送って励まし、力づけた。

1944 年 9 月、藤田嗣治や新制作派協会会員たちと神奈川県津久井郡吉野町（現在の相模原市緑区藤野）に疎開し、終戦をこの地で迎えた。《ダムのある風景》は、疎開先の家から近い相模湖を描いている。

1946 年疎開先から東京に戻った猪熊は雑誌の表紙絵や挿絵を手掛け、1948 年からは「小説新潮」の表紙絵を担当した（1989 年 9 月号まで）。この時期の猪熊は新制作協会建築部創設に尽力し、1949 年に慶応義塾

大学学生ホール壁画《デモクラシー》、1951年に国鉄上野駅中央ホール壁画《自由》を制作するなど、意識的に社会との関わりを強めていった。

4章 ニューヨーク時代

1953年に父を看取った猪熊は、長年の画業を見直しと画家としての再出発を期して再びパリに行くことを決意した。ニューヨークに立ち寄ってパリに行く予定で日本を出発したのは、1955年10月、53歳の時だった。経由地のサンフランシスコからアリゾナ砂漠を横断しサンタフェ、デンバーを経て空路ニューヨークに入った。アパートを借りた95丁目には多くの芸術家が住んでおり、ソール・スタインバーグ、マーク・ロスコらとの交流が生まれ、短期滞在の予定がニューヨークに居を定めることになった。ウィラードギャラリーと契約し、翌年初個展を開催した。「何とか払いのけようとあがき続けた具象の影はこの街でゴソッと落ちてしまった。楽に、気持ちよく仕事ができるようになった」と記している。ニューヨークでは2年に一度のペースで計10回の個展を開催した。

5章 ハワイ時代

1973年の一時帰国中に脳血栓で倒れた猪熊は、ニューヨークでの活動が困難になったため1975年にアトリエを閉じた。それ以降、冬は温暖なハワイで、それ以外の季節は日本で制作するようになった。「私はハワイに住むようになって、色のコントラストが非常に鮮やかになりました。これは東京やニューヨークでは決して出来ない色彩です。底抜けに明るいハワイの環境が大きく影響している筈です」と述べているように、ハワイでの制作は作品にさらなる変化をもたらした。1988年には60年以上連れ添った妻が他界し、猪熊は大きな喪失感を抱いた。だが、妻の死後に始まる「顔シリーズ」によって新たな展開を得た。「絵描きには定年がない。死ぬまで未知のものに向かって走り続ける」という言葉通り、1993年5月17日に90歳でこの世を去るまで精力的に活動を続けた。

6章 デザインの仕事

猪熊弦一郎のデザインの仕事でまず思い浮かぶのは、三越の包装紙「華ひらく」だろう。1950年に猪熊が千葉の犬吠埼を散策中に拾った石をモチーフにデザインし、当時三越宣伝部にいたやなせたかしが「Mitsukoshi」の文字を書き入れた。日本の百貨店で初めてのオリジナル包装紙で、当初はクリスマスプレゼント用包装紙だったのが1951年7月から三越全店で使用された。1957年から2014年まで使用された三越ショッパースも猪熊のデザインによる。

猪熊はテキスタイルデザインや本の装丁、雑誌の連載小説の挿絵などを数多く手がけた。「美術家がかぎられた自分だけのアトリエの中で一枚のタブローを深く究める事はもちろん大切な事である。(中略)出来得べくは今後、これからの新らしい仕事をしようとしている作家は、どしどし社会の生活造形の面に進出すべきでなかろうか」(「美術家と社会性」朝日新聞、1926年2月9日)と記しているように、当時タブロー絵画に比べて一段階下に見られがちだった商業美術に積極的に関わることで、社会の中で芸術家が果たすべき役割を自ら担おうとした。

7章 画家のアトリエ

「永い画家の生活をしていると住居の中には、いろいろなものが私達の本当に良き友として、あるものはまるで恋人のように静かに同居している。私の性格で、マニヤのようなコレクションのためのコレクションにはしたくないのである」

猪熊コレクションには、旅先で心惹かれて買い求めた品や友人から贈られた品だけではなく、拾った石や手近にある紙などを細長く巻いてその上から針金を巻いて作った「対話彫刻」など様々な物が含まれている。このコレクションを写真と共に猪熊自身の文章で紹介した『画家のおもちゃ箱』（文化出版局、1984年/絶版）には、イーゼルや画材のほか、絵を描いた後にパレットから捨てた絵具が取り上げられている。猪熊は「これらの色の塊を見ると、何だ捨てられた色のクズではないかと思うが、静かによく見ていると、その塊の中に、実に新鮮な色が、そのまま隠れていて、宝石のように美しい」「こんな失われかかったものの中にも、注意と愛情を持って良く見つめれば、美はどこにでも隠れているものだ」と記している。

生誕 120 年 猪熊弦一郎展

2022 年 9 月 17 日 (土) - 11 月 6 日 (日) 横須賀美術館

掲載図版／チケットプレゼント申込書

FAX : 046-845-1215 横須賀美術館行き

本展覧会の掲載図版ならびにチケットプレゼント用招待券 (ペア 10 組分/20 枚) をご希望の方、下記へご記入の上 FAX にてご請求ください。必要な図版に ☒ してください。(展覧会メインイメージは《顔 80》です)



☐ 猪熊弦一郎《サクランボ》1939 年
丸亀市猪熊弦一郎現代美術館蔵
©The MIMOCA Foundation



☐ 猪熊弦一郎《マドモアゼル M》1940 年
丸亀市猪熊弦一郎現代美術館蔵
©The MIMOCA Foundation



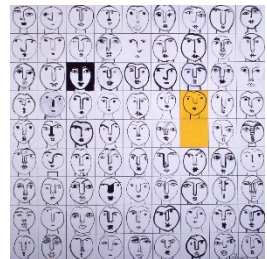
☐ 猪熊弦一郎《三人の娘》1954 年
横須賀美術館蔵
©The MIMOCA Foundation



☐ 猪熊弦一郎《風景 CX》1972 年
京都国立近代美術館蔵
©The MIMOCA Foundation



☐ 猪熊弦一郎《驚く可き風景(B)》1969 年
東京国立近代美術館蔵
©The MIMOCA Foundation



☐ 猪熊弦一郎《顔 80》1989 年
丸亀市猪熊弦一郎現代美術館蔵
©The MIMOCA Foundation

必ずご記入ください⇒ 貴社名 _____ TEL. _____

貴誌 (紙) 名 _____ ご担当者様お名前 _____

メールアドレス (画像データ送付先) _____

ご要望事項 (サイズ・解像度など) _____

チケットプレゼント用招待券 ☐ 希望する ☐ 希望しない

※チケットを 20 枚以上希望される方は、必要な枚数をお書き添えください。

ご住所 (チケット送付先) _____

○図版の使用等について

このプレスリリースに掲載されている画像データをプレス掲載用にご用意しております。

「申込書」に必要事項をご記入のうえ、ファクスまたはメールにてお申込みください。

・「申込書」に記載のある画像以外は使用できません。

・作品画像は全図で使用してください。

トリミングや文字のせなど、画像の加工・改変はできません。

・画像掲載時に作家名、作品名、制作年、所蔵者、著作権表示

(©The MIMOCA Foundation) を必ず入れてください。

・画像データ使用は、本展覧会の紹介のみとします。

・申込書に記載してあるとおりのキャプション表記をお願いします。

・WEBに掲載する場合は、解像度 72dpi 以下とし、コピーガード（右クリック不可）を施してください。

・再放送、転載など二次使用の場合、別途お申込みが必要です。

・その他、著作権により使用制約がある場合や、ご希望に添えない場合がございます。

・原稿は掲載前に必ず当館「総務係」の確認を得てください。確認に期日を要するため、予め余裕をもってお送りください。

・展覧会場の取材、撮影をご希望の場合、「総務係」までご連絡ください。来館者の安全な鑑賞環境を優先するため、ご希望に添えない場合もございます。また、事前にご連絡のない取材、撮影はお受けできません。

・掲載誌（紙）、媒体（DVD など）、URL などを「総務係」あてに 1 部以上お送りください。

○交通のご案内

■電車をご利用の場合

*京急線「馬堀海岸」駅もしくはJR「横須賀」駅から
観音崎行バス「観音崎京急ホテル・横須賀美術館前」
下車徒歩 2 分

*京急線「浦賀」駅から観音崎行バス終点「観音崎」
下車徒歩 5 分

■車をご利用の場合

*横浜横須賀道路馬堀海岸 I.C. から約 3km（約 5 分）

